

りんどうのプラグ育苗法

—— プラグ育苗の特性と方法、及び無移植・早期定植 ——

野菜花き部

1. 背景とねらい

本県の花き品目の中心であるりんどうは現在、生産量、生産額共に全国一の地位にあるが、慣行の地床育苗は、育苗場所の確保等、困難となっており産地の維持、強化のため新たな良苗生産技術の開発が重要な課題となっている。

そこで、近年注目されつつある、プラグ方式によるりんどうの育苗法とこれを用いた無移植・早期定植の効果について検討した。

2. 技術の内容

プラグ育苗床土には、りんどう培土を用い、トレーには早生種では 200セル、極晩生種で288 セル程度の規格で良苗が育成できる。苗の無移植・早期定植（6月）により、株の生育が促進され、慣行の移植育苗・定植より大幅に勝る。

又、移植と苗掘り上げ貯蔵作業が省略される事により、慣行の育苗法の約75%省力となる。

1) プラグ育苗の特性

- (1) プラグトレーを用いて育苗した場合、苗の生育経過は早晩生、トレーの規格に関係なく、S字状となり、7月上旬頃には生育が鈍化する。
- (2) 苗の生育量はプラグトレーのセルが大きいものほど大きくなる。
- (3) プラグ育苗は慣行の移植育苗に比較して苗育成から定植まで約75%の省力となる。
- (4) プラグ育苗・早期定植方式の場合、播種当年の株の生育は、慣行育苗に勝り、特に極晩生系でその差が大きく、同2年株も生育は極めて旺盛で欠株率も低い。

2) 育苗の方法

- (1) 播種用土は、りんどう培土を用いる。
- (2) 育苗に使用するトレー規格は、早生系で 200セル程度、極晩生系で 288セル程度を用いる。
- (3) 播種は、縫針を利用した方法で1セル3～6粒播きが可能で、種子10mlで12,000～13,600セルの播種が可能である。

- (4) 多粒播種した場合、間引きは播種後1ヵ月以内に行う。
- (5) プラグ育苗中の追肥は、播種後40日目頃から、1,000倍の液肥を適宜、使用する。
- (6) 4月中旬に1セル2粒播きとした場合の苗の欠株率は、供試系統、トレー規格によって異なるが、概ね6月下旬で15~20%、8月下旬で20~35%となる。

3) プラグ苗を用いた無移植・早期定植技術

- (1) プラグ育苗した苗の定植は、3月中~下旬播種の場合5月下旬~6月上旬、4月中旬播種の場合、6月下旬とする。
- (2) 定植床は、慣行法と同様の施肥量とし、黒マルチとするが、定植は、床が十分に湿った時期を選んで行う。

4) 適応試験 県下全域

3. 指導上の留意事項

- 1) プラグ育苗方式は、セル内の用土が少なく、乾燥し易いため、頭上灌水設備のあるハウス内で育苗し、灌水は通常一日一回均一に十分な量を与えるが、セル内の土の乾湿には常に注意し、高温時には遮光する。
- 2) プラグトレーは、プレス成型のプラスチック製のため基本的には使い捨てとされているが、トレーは、水稲育苗箱と同じ大きさなので、この箱を利用して管理すると最低でも2回の使用が可能である。但し、使用後は水洗して保管し、再利用の時は必ずダコニール等で消毒後、用いる。
- 3) プラグ育苗方式を利用した場合、育苗の経費は10a当たり16,638円で慣行の86%である。
- 4) 定植床のマルチは、床面に密着するように張る。
- 5) 育苗期の病害虫防除と定植後の葉枯病等の防除に努める。

4. 当該事項にかかる研究課題名 リンドウの新育苗法(1~5)

5. 参考文献

- ・長野県野菜花き試験場報告5号 P25~38 1989. 3
- ・園芸学会平成元年秋季大会シンポジウム資料 P86~91 1989.10

6. 試験成績省略